

観音院の門

吉田 純一*・木村 悠**・多米 淑人***

The Gate of Kan-non-in

Jun-ichi Yoshida・Yu Kimura・Yoshihito Tame

We make clear the architectural style, the characteristics and the original architecture of the Kan-non-in gate which is reconstructed recently in the Hondo-district, Harue-town in Fukui prefecture. The Kan-non-in gate has the `hira-karamon` style and many richly-colored sculptures. The pillars, the beams, the rafters and so on had been painted vermillion. We think that the original building of the Kan-non-in gate is the `karamon` of the Tosyogu which was built in the north-san-no-maru section of the Fukui-castle at tenth year of the Kanbun period (1670). The Kan-non-in gate is one of the valuable historic architectures of early Edo era in Fukui prefecture.

1. はじめに

春江町本堂にある観音院の門は、「福井の殿様松平家から譲り受けた」と伝わる興味深い建築である。隣接する八幡神社の鳥居の脇にたっていたが、昭和23年の福井地震で倒壊し、以来、部材は境内の倉庫の中に積まれたままになっていた。それがこの春、55年ぶりに組み立てられ、在りし日の姿が蘇った。屋根葺材や礎石・地覆の石材、組物の一部などが欠損しているものの、柱や頭貫、腕木、棟木などの主要部材はほとんど残っていて、倒壊以前の旧状をよく留めている。

本堂地区の区長桑野剛氏を通してこの門の調査を依頼され、7月30日に実測調査や写真撮影を実施した。本稿はその報告で、再現された観音院の門について建築形式や特徴ならびに前身建物について考察している。

2. 門の建築形式・規模・特徴

1) 門の形式

観音院の門は「一間平唐門」という形式の門である。「一間」は正面の柱間数がひとつであること、「平」は入り口が平側⁽¹⁾にあること、そして「唐門」は湾曲した唐破風の屋根をもつ門を意味している。

ただし、一間平唐門でもこの門は主柱の前方と後方に腕木を出し、下方は中程の控柱で支持され、上方は先端に組物を置き、柱天端から組物に海老虹梁を架け渡して軒桁を受けている。このような形態は、後掲の表1に示した重要文化財指定の平唐門⁽²⁾の中にもみられず、観音院の門独特の形態である。そして腕木と海老虹梁の間は肉厚の彫刻で埋められている。このように豊富な彫刻がみられることもこの門の特徴として指摘できる。

* 建設工学科 建築学専攻 ** 大学院科目履修生 *** 大学院生

2) 規模

主柱は約9寸(27cm)径の丸柱で、材質は樺である。正面に向って左側の柱は虫食いなど風食が著しい。主柱の間はほぼ2.7m(1間半)で、上半に縦格子を入れた棧唐戸の扉二枚を立てている。腕木を支える控柱は主柱から約60cm離れた位置にたっている。柱下の礎石は欠損しているが、倉庫の床面から軒桁上端までが約2.6m、棟木上端まで、すなわち棟高が約3.2mである。大きさ、高さからみて小規模な門といえる。

3) 細部装飾

腕木の先端にのる組物は平三斗・拳鼻付きで、頭貫上の棟木を受ける中備組物も同じ形式である。腕木の木鼻は特徴的な繰形が施され、組物につく拳鼻の絵様も彫刻的である。そして前述のように腕木と海老虹梁間には梅や牡丹などの草花を題材にした彫刻が嵌め込まれている。

主柱ならびに腕木や頭貫・軒桁・棟木などの横架材、さらに垂木や組物などは、いずれも朱塗であったことがわかる。柱などは彩色が落ち、素木にみえるが、頭貫や棟木などは現在も朱塗がよく残り、腕木などには朱の跡が残っている。なお、妻面の破風は黒塗であった。

一方、腕木と海老虹梁の間を埋める側面の彫刻、頭貫上の中備組物の肘木などには胡粉(白)や赤、青、緑の顔料が少し残っていて、いずれも極彩色に彩られていたことがわかる。つまり、この門は朱を基調とし、細部の彫刻などに極彩色が施された華麗な門であった。

4) 欠損部材

昭和23年に倒壊してから55年もの間、放置されていたにもかかわらず、部材の残存状況はきわめてよい。虫食い、風食はみられるものの、主柱は2本ともに現存し、頭貫・軒桁・棟木などの横架材や垂木、組物などもほとんどが残っている。欠損部材の主なものは、礎石と地覆などの石材ならびに扉の下端を支えていた藁座、正面左側の控壁や肘木、組物の桁の一部、頭貫上の中備え組物の肘木などである。また、垂木から上の野地板や葺材も残っていない。なお、後掲の実測図において、残存部材は黒線、欠損部材は赤線で示している。

3. 建築年代と発見墨書

1) 建築年代について

この門の建築年代を確証づける史料は見当たらず、建築様式や細部形式から推察せざるを得ない。腕木先端の繰形や頭貫の木鼻などの形状は古式で、絵様も渦の形は丸く、彫りは浅くてかつ細い。また、柱などの風食具合も相当なものである。そして上述したようにもとは柱や主要な横架材などが朱塗で、彫刻や木鼻などには極彩色が施されていた。

県内の建築において、江戸中期以降になると、彫刻が豊富に用いられる傾向が認められるが、その多くは彩色がなく、素木のままである。そして、この門の様に華麗な彩色が施されるのは、たとえば大安寺御霊屋などのように藩や藩主などに関わる建物であり、建築時期は江戸初期に遡るものが多いことが報告されている⁽³⁾。こうした建築様式の時代的変遷や傾向、あるいは材の風食状況などからみると、観音院の門の建築時期は江戸前期すなわち17世紀まで遡る可能性が強い。

2) 発見墨書

今回の調査で、主柱から前後に突き出す腕木の下端に以下のような墨書が発見された。

- ①右側後方の腕木の下端「西外」
- ②左側前方の腕木の下端「東外」
- ③左側後方の腕木の下端「東内□□」

門は入る方向が正面で「外」、出る方向が「内」になる。したがって、この墨書からみると、左側の前後の腕木(②・③)の「外」、「内」は正しいが、右側後方の腕木(①)は「内」となるべきである。

また、方位についてみると、現在は北向きであるから向かって右側が西、左側が東になり、墨書の方位はあっている。当初も北向きにたっていたのであれば、腕木の位置はこれで正しいことになる。ただし、もと南向き、つまり南から入る門であったならば、腕木の位置は左右逆になり、「東」とある腕木(②・③)は右側に、「西」とある腕木(①)は左側にこななければならない。腕木と柱の取り付け(仕口)は左右同じであろうからどちらにもつくはずである。後述するように、この門の前身が福井城三の丸の東照宮唐門であれば、唐門は南を正面にしているから現状の腕木は左右逆に取り付いていることになる。

4. 前身建物の推察

1) 地元の伝承

冒頭にも述べたように、本堂地区では「この門は福井の殿様、松平家から譲り受けた勅使門である」と伝え継がれている。

江戸時代の本堂村は春近本堂村と呼ばれ、公領すなわち幕府領であった⁽⁴⁾。しかし、福井藩が管理を任されていた藩預り地であり、福井藩や松平家とのかかわりが強かったことは十分に窺える。そして、上述のように建築年代が17世紀に遡り、かつ朱塗の軸部や極彩色の彫刻といった装飾性から判断すると、藩主もしくはそれに関わりをもつ建築であることは間違いないであろう。県内での類例として福井藩4代藩主光通によって創建された大安寺御霊屋(延宝5、1677)などがあげられる⁽⁵⁾。ただし、「勅使門」とは皇室や朝廷の勅使を迎えるために用意された門であり、武家屋敷ではほとんどみられないから、この門がもと勅使門であった可能性は低い。

2) 前身建物の可能性

では、観音院の門の前身はどのような門であったのだろうか。検討してみたい。

まず、本堂村が福井藩預りの幕府領であり、観音院の厨子扉や三方などに「三つ葉葵の紋」がみられることなどから、本堂村や観音院が福井藩や松平家あるいは徳川幕府とつながりがあり、それらに関わる建物を譲り受けた可能性は十分に考えられる。ただし、幕府関係の建物となると、福井藩内にはほとんどなく、仮に江戸から運んでくるとなれば大掛かりであり、その可能性は極めて薄いと言わざるを得ない。

そこで、福井藩あるいは藩主松平家に関わる建築にしばって考えてみることにする。

ところで、福井藩主松平家の御殿に関わるとすれば、御座所(殿様の住居)が思いつくが、「御座所絵図」(松平文庫所蔵)にみられる表門は長屋門であり、脇門や裏門も「塀重門」とあって、平唐門あるいは唐門形式の門はみられない。御座所の門ではなさそうである。

そこで改めて注目したいのは、この門が平唐門という形式であること、および彩色や彫刻など装飾性が高いことである。同じ平唐門で、国重要文化財に指定されている例をみると(後掲の表1参照)、39例中22例が家康を祀る東照宮や藩主などの霊廟の門である。しかも、それらの多くは一間であり、かつ豊富な彫刻や彩色があって観音院の門に良く似ている。たとえば、川越市喜多院の東照宮唐門、加賀の金沢城東照宮(現尾崎神社)唐門などである。

したがって、観音院の門もこれらと同じような門で、福井藩に関わるものとなれば、やはり東照宮が浮かび上がってくる。このお宮は家康を祀るものであり、幕府領(公領)であった本堂地区とも結びついてくる。

3) 福井城東照宮唐門の建築形式

一方、福井藩の東照宮はどのような建築であったのだろうか。藩政初期の東照宮は福井城の北方、神明神社付近にあった。この東照宮の建築形式名様相はわからないが、寛文9年(1669)の大火では焼失を免れた。しかし、この火災を機に東照宮は福井城内北側の清水御門の内、すなわち北三の丸に移され再建されることになった⁽⁶⁾。この時の奉行は比企佐左衛門、大工は安右衛門と佐次衛門で、寛文10年6月に完成している⁽⁷⁾。

この時つくられた東照宮の様子は約15年後に作成された「福井城下絵図」(貞享2年1685)によってわかる。図版2はこの絵図の北三の丸部分を示したもので、西側(左)が泉蔵院(御仏殿)、その東(右)にあるのが東照宮(御宮)である。

絵図によれば、南の入り口正面に鳥居があり、その内側に表門(切妻造・四脚門)、それから参道を東に進み北に折れたところに中門(以後、唐門と呼ぶ)がある。この門から東西に延びる塀があり、塀と背後の石垣に囲まれた中にあるのが中心となる社殿である。社殿は前方の拝殿(入母屋造・唐破風屋根向拝付き)と後方の本殿(入母屋造、千木を乗せる)からなり、両者は弊殿でつながっている。社殿の形式は権現造で、家康の霊廟である日光東照宮(栃木)や久能山東照宮(静岡)などと同じ造りである。つまり、この絵図の建築描写はその形態や特徴をよく捉えており、かなり信憑性が高いといえる。

東照宮の建物で、特に注目したいのが社殿の正面に立つ唐門である。図版3は図版2の東照宮部分をさらに拡大したものであるが、これより唐門の建築形式について以下のことが指摘できる。

①屋根の妻側が湾曲した唐破風であるからこの門は唐門形式である。

②屋根の平側を正面に向けているから平入りの門である。

③正面の柱間はひとつとみられるから一間の門である。

以上の①・②・③からこの門の形式は、一間平唐門であることがわかる。

④主柱の前後に控壁の表現がみられる。

⑤柱や控壁は赤で着色されているから朱塗であった。

⑥屋根は薄茶色であり、桧皮葺もしくは柿葺であったと考えられる。

5. 観音院の門と東照宮唐門の比較

1) 両者の類似性

次に、絵図にみられる東照宮唐門と観音院の門を比較してみたい。

前述のように、観音院の門は、一間平唐門という形式であり、柱など主要部材は朱塗を基調としていたが、絵図の門も一間平唐門で(①～③)、朱塗(⑤)である。さらに、観音院の門は、両側の柱から前後に腕木を突き出し、その上方に海老虹梁を架け渡し、下方は柱を立てた控壁をもつ点に大きな特色が窺えたが、絵図の門にも控壁と思われる表現がみられる(④)。つまり、絵図の門と観音院の門が同一建物である可能性がきわめて高いといえる。

なお、屋根葺材に関しては、絵図の門は桧皮葺あるいは柿葺とみられる(⑥)が、観音院の門は垂木までが残るだけで、それから上の野地板や屋根葺材は欠損している。地区の人たちによれば、倒壊する以前は瓦葺であったというが、それ以前がどのようなようであったかはわからない。

さらに、東照宮唐門は寛文10年につくられ、江戸時代前期の建築である。これに対し、観音院の門の建築様式や細部意匠もすでに指摘したように江戸前期、17世紀の様相を呈している。したがって、建築形式、様式の面でも観音院の門と東照宮唐門の間に時代的な矛盾は認められない。むしろ両者は合致しているとみることができるのである。

以上のことから、このたび再建された観音院の門は、もとは福井城北三ノ丸において寛文 10 年につくられた東照宮唐門で、それを譲り受けた可能性がきわめて高いことを指摘できる。

2) 移築の時期について

以上のように、観音院の門がもとは福井城東照宮唐門であった可能性が強い。では、それが観音院に移されたのはいつであろうか。

松平文庫の城下図を比較検討すると、先にみた貞享 2 年 (1685) からほぼ 30 年後に作成された正徳 4 年 (1714) の「御城下絵図」(松平文庫所蔵)でも東照宮唐門はまったく同じ形式で描かれている。ところが、それから 11 年後の享保 10 年 (1725) の城下図をみると、図版 4 に示したように平唐門ではなく、切妻屋根で、控壁がない中門が描かれ、これ以後幕末にかけての城下図でも同様である。したがって、正徳 4 年から享保 10 年の間に切妻屋根の中門が新たに作られたために、それまでであった唐門が取り壊され、観音院に移されたとみることできる。しかし、松平文庫の記録をみても、このころに中門が再建されたことを示す記録は一切ない⁽⁸⁾。また、享保以降の城下図では鳥居の内側の表門や西隣の御仏殿の表門・中門も貞享 2 年や正徳 4 年の城下図とは違い、しかもこれらの描写はいたって稚拙であり、余り信頼できない。さらに、この時の移築となれば、今から 300 年余も前のことになり、「殿様からもらった」という伝承が 300 年もの長い間、途切れることなく語り継がれてきたことも考え難い。

それよりも移築時期は明治以降と考えたい。なぜならば、明治 5 年ころ旧福井城内の建物は競売・入札にかけられ、売り払われている。今日残されているこの時の記録(入札人名帳)⁽⁹⁾には東照宮や唐門の記載はないが、ほぼすべての建物が対象になっており、東照宮の建物も取り払われ、この時に譲り受けたと考えられる。

これに関しても確証はないが、たとえば時代背景からみても、将軍家に対する畏敬の念が強い藩政時代に福井藩が家康に関わる建物を手放すとは考えにくく、それよりも封建時代の遺物を一掃しようとした明治になって移されたとみる方が穏当であろう。

6. 結 語

昭和 23 年の福井地震で倒壊して以来、55 年ぶりに組み立てられた観音院の門は間口一間の小さな平唐門であるが、腕木や海老虹梁を用いるとともに控壁をつけていて、平唐門でも特異な形式をもっている。また当初は柱などの軸部や頭貫・棟木などの横架材、垂木などはいずれも朱塗で、豊富につく彫刻は極彩色、破風板は黒塗に彩色されていた。小規模ながらも朱を基調とした華麗な門であった。建築年代を確証する史料を欠くが、建築様式や細部手法からみて江戸前期まで遡る建築とみられる。

この門は本堂地区に伝わるように、もとは藩主松平家にかかわる建築であったことは十分に考えられ、寛文 10 年 (1670) 6 月に福井城北三ノ丸につくられた東照宮唐門であった可能性がきわめて強い。東照宮は家康を祀る御宮であり、本堂地区が幕府領であったことや観音院に三つ葉葵の紋が見られることとも矛盾しない。

観音院の門が福井城内にあった東照宮唐門となれば、福井城に関わる数少ない建築遺構のひとつであり、春江町はもとより福井県内でも貴重な歴史的建築になる。ちなみに、今日、福井城の建築遺構として知られているのは、瑞源寺本堂・書院(福井市足羽 5 丁目)だけである⁽¹⁰⁾。

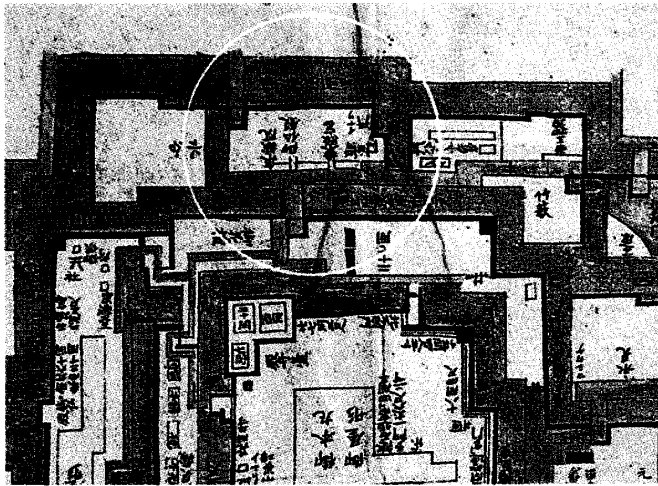
さらに、江戸時代の諸大名の城内にあった東照宮の建築遺構としては、金沢城東照宮(現、尾崎神社)など数例残っているだけであり⁽¹¹⁾、観音院の門は東照宮の建築あるいは霊廟建築の現存遺構として全国的にも注目されるものになる。

註

- (1) 建築の用語で、屋根の棟に対して平行な面を「平」といい、直角な面を「妻」という。
- (2) 『国宝・重要文化財大全 12 建造物（下巻）』毎日新聞社 2000 年 3 月を参照
- (3) 高島猛・福井宇洋・吉岡泰英『福井の建築』（『福井県史 資料編 14 建築・絵画・彫刻等』別冊）
平成元年 7 月 参照
- (4) 杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』松見文庫 昭和 55 年 10 月
巻十 坂井郡（上）に「高八百拾五石九斗壹升 同（福井下領）春近本堂村」とある。
- (5) 註 3 と同じ
- (6) 『国事叢記 上』寛文 9 年 4 月 15 日条
「東照宮御宮并安楽院今泉蔵院相残、御首尾克旨。於江戸光通君「御宮ハ」と御尋の時、則預り狛杵允
藤原貞澄 伊勢守李澄男。九千石与力共。万治二己亥年三月繼家。元禄十六癸未年九月十九日薨。姓院了然本明。 杉田主水藤原正治 常陸守三正男。慶安二己丑年繼家。五千石 防止申段達御聞、
殊の外御機嫌、御褒美可被下旨の処、酒井玄蕃元知諫奉。（後略）」
これより、東照宮は寛文の火災で焼失を免れたことがわかる。
また、『続片聾記 二』寛文 10 年 6 月条に「一、御宮并御仏殿此節迄神明宮之辺御宮跡今之処、今年清水門之内へ御移御修造有之」とあり、北三の丸に移されたことがわかる。このことは松平文庫に所蔵されている城下絵図の北三の丸部分を見比べても明らかで、寛文の大火以前の図では、北三の丸の泉蔵院の東隣に必ず東照宮が描かれている。
- (7) 『続片聾記 八』 光通公時代
「一、御宮棟札銘寛文拾年六月 奉行比企佐左衛門、大工安右衛門、佐次衛門」
註 6 に示したように、東照宮は寛文の火災で焼失を免れており、これを北三の丸にそのまま移して再建されたことも考えられる。現段階では移築か、新造か即断できないが、上記の『片聾記 二』の記述に「修造」とあることから考えると、移築にしてもかなりの修理が加えられたとみることができる。
- (8) 『元福井城二ノ丸建家入札人名帳 足羽縣』など 3 冊 福井大学図書館『高島文庫』所蔵
いずれにも年代の表記はないが、表紙にある「足羽縣」は「明治 4 年 12 月から同 6 年 1 月まで存在しただけであり、入札が行なわれたのはこの間と判断できる。なお、人名帳は、現在伝わっている 3 冊以外にもあったことが考えられる。
- (9) 福井藩の正史である『国事叢記』や『片聾記』『続片聾記』などを参照した。
- (10) 拙著『ふくい建築（野の花文庫 6）』（財）福井県文化振興事業団 平成 13 年 3 月 など参照。
- (11) 金沢市史編纂委員会『金沢市史 資料編 17 建築・建設』平成 10 年 3 月 など参照。

（謝辞）[松平文庫]所蔵の城下図の閲覧・掲載に関しては、松平管理事務所のご理解をいただき、福井県立図書館長野氏には管理事務所との交渉ならびに部分写真撮影などの協力を得た。記して感謝申し上げる。

観音院の門



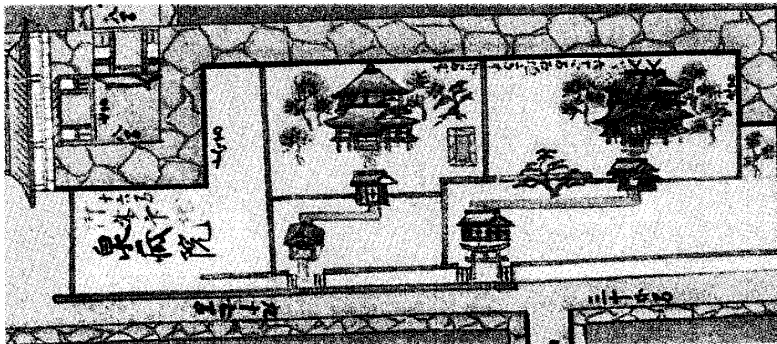
図版 1

「福井城郭図」

(文政2年写、松平文庫)

北三の丸 (○印)

図の下方が本丸

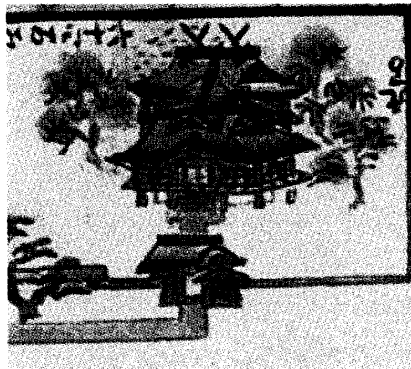


図版 2

「福井御城下絵図」

(貞享2年 松平文庫)

北三の丸の東照宮と御仏殿



図版 3

上記絵図の東照宮唐門 (中門) と社殿

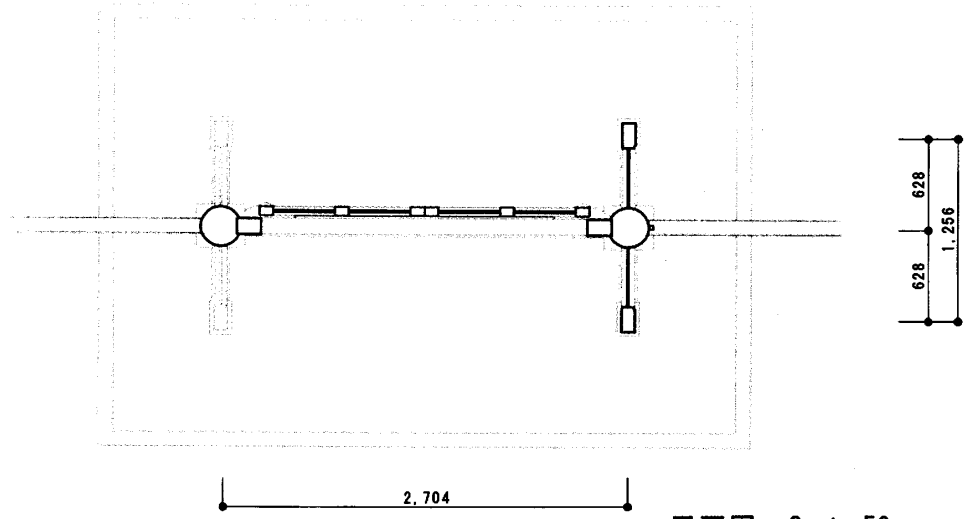


図版 4

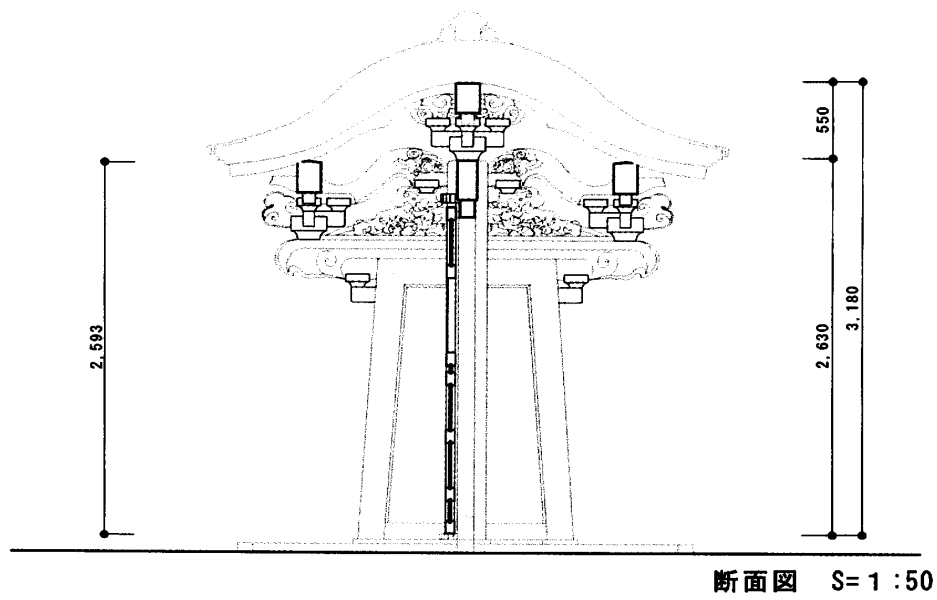
「松平千次郎領知越前国福井城下
家中寺社並町絵図」

(享保10年、松平文庫)

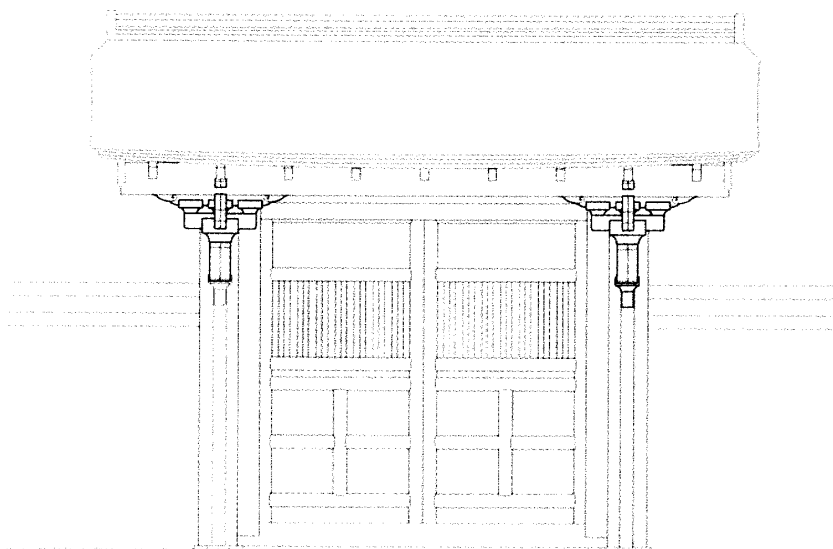
北三の丸の御宮 (東照宮) と御仏殿



平面図 S=1:50



断面図 S=1:50



立面図 S=1:50

表－1 重要文化財指定の平唐門

番号	名称	所在地	時代	形式	備考	東照宮・ 霊廟関係
1	玉鳳院四脚門	京都	室町中期	一間平唐門	簡素な門	
2	園比屋武御嶽石門	沖縄	正徳14(1519)	一間平唐門	石製	◎
3	興臨院表門	京都	天文2(1533)頃	一間平唐門	簡素な門	
4	北室院表門	奈良	室町後期	一間平唐門	簡素な門	
5	北野天満宮後門	京都	慶長12(1607)	一間平唐門	簡素な門	◎
6	三宝院唐門	京都	桃山	三間平唐門	扉に桐・菊の彫刻	
7	久能山東照宮唐門	静岡	元和3(1617)	四脚平唐門	彫刻・彩色・華麗な門	◎
8	東照宮唐門	和歌山	元和7(1621)	四脚平唐門	彫刻・彩色・華麗な門	◎
9	旧台徳院霊廟丁字門	埼玉	寛永9(1634)	1間×1間平唐門	彫刻・彩色・華麗な門	◎
10	日吉大社末社東照宮唐門	滋賀	寛永11(1636)	四脚平唐門	彫刻・彩色・華麗な門	◎
11	東照宮坂下門	栃木	寛永13(1636)	一間平唐門	彫刻・彩色・華麗な門	◎
12	東照宮背面唐門	栃木	寛永13(1636)	一間平唐門	彫刻・彩色・華麗な門	◎
13	東照宮唐門	埼玉	寛永17(1640)	一間平唐門	石柱の控え、禅宗様	◎
14	東照宮旧奥社唐門	栃木	寛永18(1641)	一間平唐門	石造	◎
15	尾崎神社中門	石川	寛永20(1643)	一間平唐門	金沢城東照宮を明治 11年移築	◎
16	東照宮唐門	群馬	寛永21(1644)	四脚平唐門	漆塗、比較的簡素	◎
17	仁和寺御影堂中門	京都	寛永頃	一間平唐門	簡素な門	
18	普賢院四脚門	和歌山	寛永頃	四脚平唐門	装飾的	
19	滝山東照宮中門	愛知	正保3(1646)	一間平唐門	禅宗様	◎
20	東照宮奥社唐門	栃木	慶安3(1650)	一間平唐門	銅製	◎
21	樽谿神社唐門	鳥取	慶安3(1650)	一間平唐門		
22	東照宮中門	愛知	慶安4(1651)	一間平唐門	彫刻・彩色	◎
23	源敬公(徳川義直)廟唐門	愛知	承応元(1652)	一間平唐門		◎
24	輪王寺大猷院霊廟掖門	栃木	承応2(1653)	一間平唐門	漆塗、華麗な門	◎
25	輪王寺大猷院霊廟奥院鑄拔門	栃木	承応2(1653)	一間平唐門	銅製	◎
26	東照宮仮殿唐門	栃木	江戸前期	四脚平唐門		◎
27	東照宮仮殿掖門	栃木	江戸前期	一間平唐門		◎
28	二荒山神社唐門	栃木	江戸前期	一間平唐門	漆塗・彩色	
29	竜光院兜門	京都	江戸前期	一間平唐門	簡素な門	
30	法隆寺西園院唐門	奈良	江戸前期	一間平唐門	簡素な門	
31	厳有院霊廟奥院唐門	東京	貞享2(1685)	一間平唐門	銅製	◎
32	二荒山神社別宮本宮神社唐門	栃木	貞享2(1685)	一間平唐門	漆塗	
33	根津神社唐門	東京	宝永3(1706)	一間平唐門	華麗な門	
34	常憲院霊廟奥院唐門	東京	宝永6(1709)	一間平唐門	銅製	◎
35	二荒山神社別宮滝尾神社唐門	栃木	元文5(1740)	一間平唐門		
36	妙義神社唐門	群馬	宝暦6(1756)	1間×1間平唐門	華麗な門	
37	神部神社浅間神社大歳御祖神社境内社麓山神社中門	静岡	文政5(1822)	一間平唐門	漆塗、華麗な門	
38	大歳御祖神社中門	静岡	文政9(1826)	一間平唐門	漆塗・彫刻、華麗な門	
39	神部神社浅間神社大歳御祖神社境内社八千戈神社中門	静岡	天保9(1838)	一間平唐門	漆塗・彫刻、華麗な門	



写真1 妻側の様子

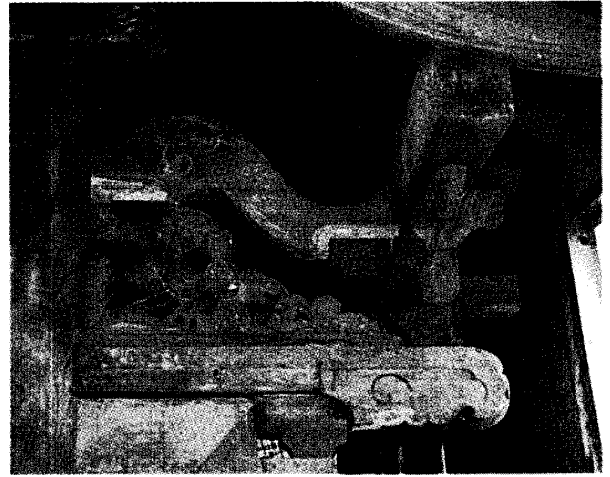


写真2 腕木・彫刻・海老虹梁

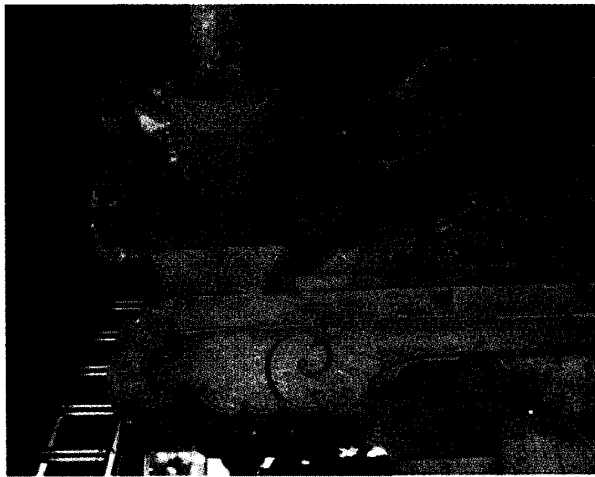


写真3 腕木の繰形・組物



写真4 棟木・母屋を支える絵様肘木



写真5 側面の控壁

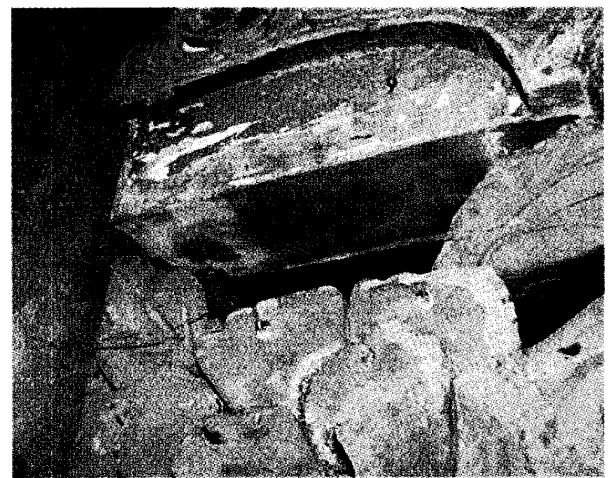


写真6 腕木下端の墨書「東外」

(平成15年12月2日受理)